

阿蘇外輪山の内側に位置する神社の配置と人々の暮らしの関係

準会員○原田紫帆* 正会員 辻原万規彦**

7. 都市計画-4. 地区とコミュニティー 都市計画

集落構成、地形、スケール、現地調査、空中写真

1. はじめに

熊本県の北東部に位置する阿蘇地域は、四方を山に囲まれており、阿蘇五岳を中心に雄大な自然が広がっている。かつて、広いカルデラ湖があったとされる火山のふもとには、太古の昔から人が住み、開拓の歴史を切り開いてきた。その歴史の中には、神話や伝承が今も伝えられており、阿蘇神社にみられるように、神社も数多く鎮座している。

先行研究では、集住とくに農業地帯への集住には、一般的に神社の存在がすでに指摘されている¹⁾。したがって、神社は集住を支える何らかの役割を持つものだと考えられる。一方、集落に関する研究は数多く行われているが、多くの場合、神社は集落の一構成要素として取り上げられている²⁾にすぎない。地域的な広がりの中で、多くの神社を対象にその立地と人々の暮らしの関係を検討した研究はない。そこで、なぜそこに集落ができて発展していったのかを神社を指標に解明することを試みる。

また、現在、熊本県神社庁で把握している神社は、神社側が登録しているところのみであり、阿蘇全域の神社把握はできていない。これは明治末期から大正初年にかけて行われた、神社整理・神社合併・神社合祀といわれる政府主導の政策のためだと言われる³⁾。

以上のような背景のもと、本研究では、阿蘇外輪山の内側にあるすべての神社を対象として、全数調査を行う。次に、集落の成り立ちを神社配置や地形の視点から検討する。さらに、人々の暮らしと神社との関わりを明らかにすることを目的とする。

2. 調査の方法

本研究では、阿蘇カルデラにおける外輪山の内側(以下、「阿蘇外輪山内」と称する)、すなわち火口原と阿蘇五岳に鎮座する神社を対象とした。火口原の北側は

「阿蘇谷」、南側は「南郷谷」と呼ばれ、それぞれ、黒川と白川が流れる。

まず、ゼンリンの住宅地図⁴⁾から地図記号の神社マークが付いているもの(名称不明のものも含む)をすべて書きだした。阿蘇外輪山内に鎮座する神社数は191社であった。次に、平成23年7月~10月の期間で対象地域の神社をすべて巡り、現地調査を行った。しかし、そのうち2社が通行止めなどの理由で調査できなかった。したがって本研究では、阿蘇外輪山内に鎮座する189社を対象とした。また、神社配置図を作成するために空中写真⁵⁾を用い、阿蘇外輪山内全体との関係や神社周辺の状況を観察した。

3. スケールの違いによる神社の立地の分類

まず、神社と人々の暮らしや地形、自然との関わりを検討するために、神社の周辺環境によって住宅地内とそれ以外に分類分けした。それ以外に当てはまった神社はそれぞれ、田畑の中、山麓、山の中、河川の側、水源地、丘の6つに分類した(表1)。次に、スケールの違いで着眼点を変え、神社の立地や地形からだけでなく集落のひろがりや、神社の敷地と周囲との関係からも神社と人々の暮らしについて検討した。

(1) 10万分の1スケールでの神社の立地

まず、空中写真8枚を、スケールを合わせてつなぎ、阿蘇外輪山全体の1枚の地図にした。空中写真を選ぶ際、対象地域が写し込まれている中で、できる限り新しい年代の空中写真を使用した。しかし、空中写真撮影時の神社の周辺状況が現在と変わっており、空中写真だけでは神社の位置が判明しにくいことがあった。そのため、住宅地図や道路地図、現地調査をもとに神社の位置をプロットした。このようにして作成した10万分の1スケールでの神社の位置図を図1に示す。

(2) 1万分の1スケールでの神社の立地

図1の神社位置図をもとにスケールを1/10下げ、縮尺を大きくした神社位置図を作成した。このスケールでは、神社が集落のどこに立地しているのかに焦点を当てているので、集落単位で小さく切り分けした。このスケールでも、地形や自然環境との関係を考えることができ、同時に、道路や鉄道などのインフラとの関係も考えることができる。地形として、山裾、平野、川沿いを選び、インフラとして道路沿いを選び、集落ごとに切り出した神社の位置図を、表2に示す。なお、これらの位置図は図1をもとに作成しており、実測は行っていないので距離は正確ではないものもある。

(3) 千分の1スケールでの神社の立地

(2)のスケールよりもさらに1桁縮尺を大きくすると、神社の敷地と周囲の様子がわかる。ここでは、最初に分類分けした住宅地内に鎮座する103社の神社に焦点を当てた。空中写真と住宅地図から1社1社の配置図を作成し、神社に接する道、神社敷地内にある建物、参道の有無、鳥居や社殿の位置などの特徴から5つに分類した。模式図などを表3に示す。

4. 神社の立地と人々の暮らしの関係

表1から、住宅地内に鎮座する神社が全体の半数以上となり、阿蘇にある神社は人々の暮らしと身近な関係にあることがわかる。また、全神社を、名称や祀られている祭神の種類で分けたものを表4に示す。天満系は、「菅原神社」や「天満宮」と名称がついている神社、または、祭神が菅原道真と判断できる神社である。阿蘇神社系は、阿蘇神社の祭神（健甕龍命を始め12神）を祭神とする神社である。その他の稲荷系、八幡宮系、弁財天、日吉系、熊野神社系は、それぞれ「稲荷」、「八幡宮」、「弁財天」、「日吉」、「熊野」を名称の一部に含む、または一致する神社である。

表1と表4から、天満系は住宅地内に分布が多いものの、全域に立地していた。それに比べ、稲荷系や阿蘇神社系はほとんど住宅地内に立地していた。稲荷系は屋敷神、阿蘇神社系は農耕や水の神様を祀っているので、神社名称や祭神においても、局所的ではあるが、人々の生活と深い関わりがあると考えられる。

(1) 地域の中での神社の立地

図1より、阿蘇外輪山内全体で南側（南郷谷）より

北側（阿蘇谷）の方が神社数が多いことがわかる。さらに、阿蘇谷の中でも、外輪山沿いに多く分布が見られる。ここは、火口原の北隅にあたる場所であり、北を山で囲い、日当たりも良く、豊かな水もあるところ⁶⁾なので、人々が生活するためには住みやすい環境が整っていた。したがって、古くから集落が形成されて、神社が創建された、もしくは神社が創建されて集落が形成されたと考えられる。逆に、火口丘の裾は水も乏しく、土もやせており、生活がしにくかった⁶⁾。そのため、神社や集落が分布していないと考えられる。また、阿蘇外輪山内の南側（南郷谷）で川の側に神社が位置していることも、豊かな水を確保しやすく、生活環境が良かったためだと考えられる。

阿蘇外輪山内の北側（阿蘇谷）は碁盤の目のようなまっすぐな道が多いのに対し、南側（南郷谷）は平野部分が少ないことも関係して、うねっている道が多い。北側に古墳が多く点在し、阿蘇谷の北東奥に位置する手野の地は、阿蘇でもっとも早く農耕が栄えた地域であった⁷⁾。したがって、早い時期から開発されていた北側（阿蘇谷）に神社が多く、開発が遅れた南側（南郷谷）には神社が少ないと言える。このように、神社の立地状況を明らかにすることで、過去の地域の歴史を裏付けることができる。神社は古くは1000年前に創建されたと言われるものもあり、地域の歴史を探る指標になるとも言えよう。

(2) 集落の中での神社の立地

1万分の1スケールでどこに集落（住宅の密集地）が位置しているかをみると、山裾、平野、川沿い、道路沿いと分類できた。表2では12区域挙げているが、これは図1を1/10にして区分けしたときに神社が分布している地域を取り上げたものである。薄く色づけているところが集落である。

阿蘇外輪山の北側（阿蘇谷）にある地域ほど集落が形成されており、南側（南郷谷）は住宅が点在していた。そのため取り上げた地域名に偏りがでている。

表2から、集落と神社の関係を読み取ることができ、一つの集落に必ず一つは神社が鎮座していることがわかる。福岡県旧柳川市でもほぼ一集落につき一社の形をとっている地域があり⁸⁾、神社は集落において重要な構成要素の一つとなっていることが考えられる。

阿蘇外輪山内の集落は、山裾に広がっている集落が

表1 神社の周辺環境による分類 (単位: 社)

住宅地内	田畑の中	山麓	山の中	河川の側	水源地	丘	合計
103	35	27	6	13	4	1	189

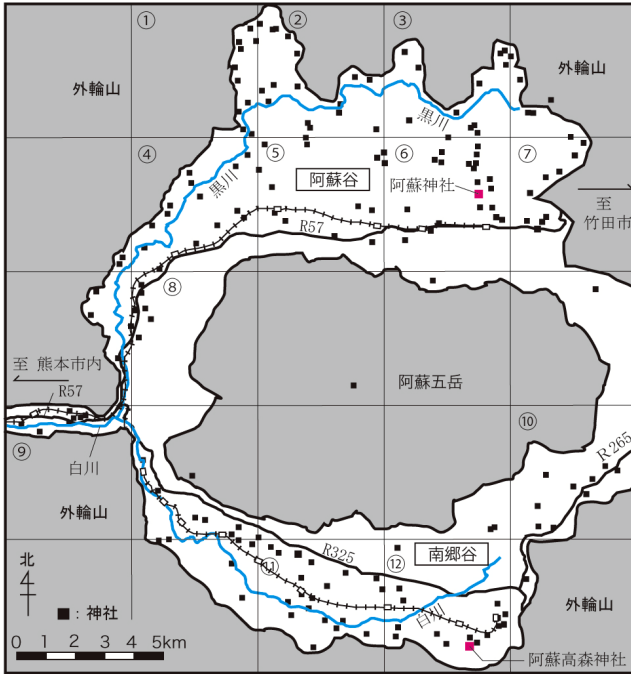


図1 阿蘇外輪山内での神社の位置 (S:1/100,000)

一番多く、次いで平野であった。阿蘇で暮らす人々は農耕中心の生活をしており、豊かな土壌や、水が比較的確保しやすい平野に田畑を作っていると考えられる。昭和57年に阿蘇神社の祭りとして「阿蘇の農耕祭事」が国の重要無形文化財に指定されている⁷⁾。農耕祭事が今も行われていることから、農耕中心の生活の中に、神社が身近に存在していると考えられる。

南郷谷は、比較的目立った集落がなかった。しかし、その中でも、白川沿いにはいくつかの集落が存在している。白川水源や竹崎水源などの水資源が豊富であり、農耕に必要な水資源を確保できるためだと考えられる。実際に湧水地の隣にある岩下神社では、毎年7月18日の夏祭り、11月18日の秋祭りが行われている⁹⁾。水に対する感謝の意を示す風習が今も受け継がれていることから、神社は人々の暮らしの一部になっていると考えられる。

赤水、色見の共通点として、かつての豊後街道をほぼ継承した国道57、265号線沿いに集落が広がっている。昔から交通の便がよく、そのため集落が形成され

表2 集落内での神社の位置 (S:1/10,000)

地形	山裾	①西小園	②湯浦	③山田・手野	⑦坂梨	⑨立野	
	平野	④乙姫	⑤内牧	⑥一の宮	⑫高森		
	川沿い	⑪白川					
	インフラ	⑧赤水	⑩色見				

表3 神社の敷地と周囲の環境 (模式図、S:1/1,000)

模式図	A	B	C	D	E	
	分類	一般型	小規模型	住宅地奥まり型	公民館奥まり型	民家付属型
	社数	69	17	12	4	1
	割合	67.0%	16.5%	11.7%	3.9%	0.9%

表4 神社名称・祭神別の分類（単位：社）

天満系	稲荷系	八幡宮系	阿蘇神社系	弁財天
57	9	7	11	3
日吉系	熊野神社系	その他	不明	合計
4	2	65	31	189

その他：8つの分類に属さなかったもの

不明：特定的神社名称をもたないもの、または確認できないもの

たと推測できる。色見地区には、熊野神社が鎮座しており、安産祈願や交通安全の祈願がされている。人々の暮らしの一部である道路も、神社と深く関わっていると考えられる。このように、人が集まってできる集落と神社は密接な関係にある。

集落の成り立ちには地形が関わっており、集落の発展や人々の暮らしの便宜のために周辺環境が整備されたと考えられる。また、その際、人々の暮らしを支える神社が創られたと推測できる。

(3) 神社の敷地と集落の関係

表3では、住宅内に鎮座する神社を対象に、神社の敷地と周囲の関係を5つに分類した。また、それぞれの割合も示した。

Aは一般的な神社で、鳥居または入り口があり、参道から社殿へと続くタイプである。Bは小規模な神社で、鳥居または入口はあるが、参道はなく社殿のみのタイプである。Cは、大きな道路から奥まった位置に鳥居があり、参道から社殿と続くタイプである。Dは、公民館や集会所が神社と同じ敷地内にあるタイプである。Eは、神社が民家に付属しているタイプである。

半数以上がAに分けられた。この中で、参道が40mを超す長い参道は3社しかなく、ほとんどの神社の参道は短かった。参道という要素は、建築当時の神社空間を如実に表している⁸⁾。したがって、集落の形成にあわせて、神社ができたため、敷地も広くはなく、参道が短くなったと考えられる。B、Cの割合が高くなっているのも、集落の形成にあわせて、神社ができたからだと考えられる。場所に限りのある住宅地内の狭いところでも、人々の生活と共存するために建てられたと推測できる。Dは、人々の生活と密接に関係し、集まりの空間として利用されている神社であると考えら

れる。ただし、歴史的には、人々の交流の場として利用されていた神社に、公民館などが併設されたと考えられる。また、実際に同じ敷地内ではないが、近隣に公民館や集会所、小学校などがある神社は、住宅地内の全神社のうち20%にのぼった。Eも特殊な例ではあるが、人々の生活と密接に関わっている事例である。

5. おわりに

本研究では、人々の暮らしと神社との関わりを明らかにすることを目的に、阿蘇外輪山内にある神社を対象として、神社配置や地形の視点から集落の成り立ちを検討した。

集落の成り立ちには地形が深く関わっていたとわかった。集落が形成され始めた後に、集落の発展や人々の生活の便宜のため、周辺環境を整備したと考えられる。よって、神社は集落の形成とともにできたと考えられる。阿蘇では、神社は祭事を行う重要な場所であるが、普段は、人々の生活と身近に存在しているものだった。神社は人々にとって遠いものではなく、集落を見守ってくれる存在であり、かつ地域のコミュニティーの場としても活用されていると考えられる。

189社の神社の中には、名前がわからないものも多く、時間の都合上完全な把握はできていない。今後の課題として、名前や祀っている神様の種類などを調査し、阿蘇全域の神社把握を行う必要がある。

注

- 1) 後藤隆太郎、中岡義介：佐賀干拓地における自然的ウォーターフロントの土地と居住地の形成に関する考察、日本都市計画学会学術研究論文集、第32巻、pp.703~708、1997.10
- 2) 米澤充、藤川昌樹：つくば市における集落と神社類型の相関性（鹿島社と八坂社に注目して）、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2、pp.431~432、2007.7
- 3) 櫻井治男：地域神社の宗教学、弘文堂、2010.12
- 4) ゼンリン編：住宅地図 2005.8(阿蘇市・産山村、高森町、南阿蘇)
- 5) 国土地理院所蔵の次の空中写真を用いた。KU822X-4-35(1982.5.23撮影)、KU851Y-3-11(1985.5.8撮影)、KU851Y-3-15(1985.5.8撮影)、KU851Y-5-13(1985.5.8撮影)、KU851Y-4A-16(1985.5.22撮影)、KU851Y-4B-10(1985.5.22撮影)、MKU20036X-13-23(2003.5.1撮影)、MKU20036 4-35(2003.5.1撮影) (撮影年月順)
- 6) 宮本常一：私の日本地図11(阿蘇・球磨)、未來社、2010.7
- 7) 阿蘇惟之：阿蘇神社、学生社、2007.1
- 8) 野田大輔、菊池成朋、牛島朗：農村集落における神社空間・祭礼の類型的考察(水郷柳川の居住特性に関する研究 その9)、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2、pp.215~216、2006.7
- 9) 現地調査による

*：熊本県立大学環境共生学部

**：熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士(工学)

Prefectural University of Kumamoto

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.